編集後記：去る２月18日から20日にかけて，「第23回北方圏国際シンポジウム」（紋別市，オホーツク海･氷海研究グループ主催）に参加してきました．当シンポジウムは，「流氷と氷海」に関わりを持つ全ての分野の研究発表や情報交換とオホーツク海の産業・経済の発展及び国際色豊かで個性的な生活・文化を創造することを目的とし（シンポジウム開催案内より抜粋），毎年流氷が訪れる時期に北海道紋別市にて開催されており，日本気象学会も後援しています．

昨年梅雨ごろに参加を打診され，北海道へ行けるからと二つ返事で引き受けたものの，直前まで寒さのことをすっかり忘れていました．南国育ちの私には季節風吹き荒れる真冬の北海道が想像できません．コート，マフラー，ニット帽，厚手の手袋などはもちろん，股引，重ね履き靴下，携帯懐炉，遭難時（？）用非常食などなど，思いつく限りの防寒対策をしての出発です．しかし，飛行機から降り立った紋別は想像以上に暖かく，拍子抜けしてしまいました．それもそのはず，ちょうど流氷が紋別から離れていた時期で，道外からの参加者達は「せっかく流氷を見に来たのに…」と残念がっていました．

さて，肝心のシンポジウムですが，さすが「全ての分野が対象」というだけあり，分科会だけでも「海洋生物」，「生物・水産」，「気候変動」および「海洋と気象」など多岐に亘っていました．「氷海での油の除去方法」などは，こうした機会でもない限り知ることはなかったと思います．他にも専門外のお話を聞くことができ，なかなか面白かったです．

面白いといえば，シンポジウムのお手伝いに市民ボランティアの方が多数参加されているのは意外でした．大会での受付や飲物の用意のほか，懇親会でも色々とお世話をしていただきました．懇親会にてボランティアの方々と交流のできる国際シンポジウムというのもあまりないのではないでしょうか？　振り返ってみると，主催者，ボランティアおよび参加者がともに作り上げていく，そんな感じのシンポジウムだったような気がします．

最後に，大会関係者ならびに参加者の皆様，シンポジウムでは大変お世話になりました．できれば来年もまた参加したいと思っています．ただ，今度こそ流氷を間近で見たいものですね．せっかく股引まで準備したのですから．

（近澤昌寿）